

石巻専修大学情報交換会 報告

渡辺 英次 (商学部准教授)

1月23日(木)、石巻専修大学役員会議室にて、人間学部長山崎省一教授、山内武巳准教授、永山貴洋助教、事務課進路支援担当石川栄一氏と情報交換会を行った(山内准教授、永山助教は校務により途中退席)。主な内容は、1. 震災当時の状況、2. ボランティア受入状況について、3. スポーツと社会貢献について、4. 石巻専修大学の現況 5. 施設見学であった。以下にその報告を行う。

1. 震災当日からの対応について

震災当日より、山崎人間学部長、今野常務、理工学部長、事務部長が学生の安否、住民の受け入れ、復興について対応した。受け入れについて、直後は大学に所属する学生の安否、受け入れが優先され、この時はまだ4月から授業が開始されると考えられていた

め、市民の受け入れについては意見が一致しなかった。2日目から市民が続々と大学を頼って来られたので、困っている人を助けるのは当然で受け入れを順次進めた。最終的には1000名ほどの市民を受け入れた。教室や体育館を開放したが、椅子が固定されている教室は人数があまり入らず、使い勝手が良くなかったとのことだった。

2日目以降、ボランティアの方々だけでなく、マスコミ関係者が数多く来校したため、対応が大変であった。現在は落ち着いているので復興支援のため現況を情報発信する使命があるのでどんどん来てほしいとの事。石巻専修大学と専修大学でもっと大学間連携を深める必要がある。

2. ボランティア受け入れ状況について

2日目には NPO のボランティア団体が来られた。ボランティア団体受け入れの可否については教員間でも賛否あったが、当時の状況から判断しすぐに受け入れを進めた。野球部の屋内練習場やグラウンドをボランティアの基地、荷物の捌き場とした。体育館は県の合同庁舎に貸出した。学生には施設が十分使用できず不自由な思いをさせてしまったそうだが、学生の理解があり、機能的に受け入れが進んだ。

他大学のボランティアも数多く来校し、小学校での子ども達との触れ合い等、人的な部分で大変助かったが、複数でいらっしゃるの毎回説明をする必要があり、対応が大変であった。受け入れ先のニーズや状況等も確認する必要があるだろう。また、一回限りの単発的なイベントが多いので、子ども達の顔がわかるように継続してほしいとの事であった。



山崎省一人間学部長と佐藤雅幸スポーツ研究所長。相互の研究協力はもちろんのこと、学生間の交流も含めて今後も継続して情報交換を行いたい。



山崎省一人間学部長。震災当時から現在までの石巻専修大学の取り組み、学生の状況、今後の展望について情報提供いただいた。



石川氏。午前中から視察に同行いただき、震災前後の石巻市内の移り変わりや復興状況、石巻専修大学の状況等解説いただいた。

金沢の大学からは平成 23 年度から 3 泊 4 日、数十名単位でボランティアに来ていただいております。現在は受け入れ態勢も落ち着いているので足を運んでほしいとの事。現在、ボランティアの種類としては、仮設住宅に行って話を伺う（傾聴）、大学内で運動会、スポーツ教室、まちマップ作り等がある。外から来る先生が日常的にボランティア活動するのは現実として難しいので、日常的な活動は石巻が基本的に進めている。被災した小学校は中学校に間借りしている事から、ブランコなどの遊具がなく、住まいが遠くなった多くの小学生はバスでの送迎となり、帰りの時間が決まっているので身体を動かす機会を逸している。一度帰ってしまうと仮設住宅から外にはあまり出ず、大学にもなかなか出て来れないので、体力の低下が懸念されている。バスを大学経由で週 3 日身体を動かす日をつくったり、長期休暇時に行うボランティアプログラムを作成する等考えなければならぬ。イベントを実施しようと考えない方がよく、5～10 名程度の少人数で学校に行くような活動が良いとの事。

3. スポーツと社会貢献について

阪神淡路大震災後の事例報告等から、被災者のエコノミー症候群やそれに伴う健康被害、子ども達の事例報告からは虫歯の増加、体力の低下が確認されているため、その予防のために 3 月中旬から小学校やコミュニティーセンター等の施設周りを始めた。併せて石巻体育協会関係者に対して講習を行い、運動指導できる指導者を増やした。大学としては、ボランティア活動への学生の参加は準備不足もあり危険と判断して出さなかった。ただ、個人的には率先してボランティア活動を行っていたようである。

イベントとしては平成 25 年 3 月に陸上男子 100 メートルの元世界記録保持者カールルイス、3 段跳びの元世界記録保持者ウィリーバンクス、走り幅跳びの現世界記録保持者マイクパウエルが来校して運動教室を行ったり、今夏にはオリンピックが来校してイベントを行った。運動会も行ったが予想よりも人の集まりは少なかったとの事。来れば楽しんでいただいているので、リピーターが多く

なっている。来れない人には来れない理由がある事から、いろいろなサポートを考えなければならぬ。震災から 3 年が過ぎようとしている中、スポーツにおける復興支援の形としては支援を継続する事で出身選手が活躍し、指導者となり、石巻に戻って指導を行う事が出来るような仕組み、スポーツ合宿や選手の育成講習、指導者講習会等で石巻に来ていただくことが今後望まれる形かもしれない。

4. 石巻専修大学の現況

震災後は一時的にボランティア活動を単位化した。現在も仮設住宅で活動を続けている。新たに女川小学校に定期的にボランティアを出している事も含め、ボランティア組織を人間学部を作り、継続して進めていきたいと考えている。

産官学のプロジェクトとしては集まりやすい場所・地域や仮設住宅での健康教室の実施、経営学部では最近サバだしラーメンがマスコミに取り上げられている。理工学部ではものづくりが行われており、学生が積極的でいろいろ持ってきており、うれしい悲鳴を上げている。ストレスを抱えている学生はいると思うが、表面上は把握できていない状況である。体育の授業は必修で行っており、グループを作っているいろいろな競技を行っている。集中授業も展開し、石巻市内でシーカヤック、安比高原でスキー・スノーボードを 3 泊 4 日、それぞれ隔年開講している。体育会活動は個々の学生は頑張っているが記録は出していない。スポーツ推薦制度はあるが指導がなかなか出来ない状況にあった。次年度からは指導の時間を決めて体育会活動を支援していきたい。専修大学—石巻専修大学間で学生が行き来しやすくなる、相互乗り入れできるようなシステムがあれば良いと思っている。



5. 施設見学

広大な敷地にあるグラウンド、体育施設、受け入れに使用した教室、図書館、学食を見学した。震災後からグラウンドを含めた体育施設はヘリポートや自衛隊の宿营地、県合同庁舎、石巻日赤病院に受け入れ困難な患者の搬送先、ボランティアセンターとして機能したとの事。図書館内には震災前の石巻市門脇町、南浜町周辺の状況を 3D カラープリンタで作成した街並み模型が展示されている。震災当時の航空写真と見比べることで津波による被害の状況が確認できた。

情報交換会では和やかな雰囲気の中、関連な意見交換が行われた。震災当時の混乱の中、学生、市民、ボランティア団体の受け入れ、コーディネートに奔走した様子を伺う中、教職員、学生自身も被災者であるがその事はおくびにも出さず、気高い信念に基づいて石巻の将来のために行動されている事を感じ取る事が出来た。大学間・学生間交流の推進、ボランティア活動のあり方、スポーツと社会貢献の現状と求められること等、数々の示唆をいただいた。研究所として実現可能な活動を推進していきたい。

最後に、学期末の教務、校務多忙の中、貴重な時間を割いてご対応いただきました山崎人間学部長、石川氏、山内准教授、永山助教はじめ石巻専修大学教職員の皆様、今回の情報交換会をご支援いただきました本市川常務に厚く御礼申し上げます。



3Dプリンタで作成された震災前の石巻市門脇町、南浜町周辺の状況。震災当時の航空写真と見比べると津波による被害の状況が確認できる。図書館内に設置されている。



広大な敷地、体育施設は震災復興の拠点として機能した。

震災後に設置されたベンチ。ベンチ部分が開口レコンロになっており、炊き出しが出来るように工夫されている。

